

サマー・スクール参加者の参加意識の変化について

— 事前・中間・事後アンケートの結果から —

速水敏彦*・金井篤子*・三後美紀**

目的

方法

結果

1. 事前アンケートの結果
2. 中間アンケートの結果
3. 事後アンケートの結果
4. 3回のアンケートのまとめ

考察

1. 参加者からのサマー・スクールに対する評価について
2. サマー・スクールの実施効果について

目的

今回のサマー・スクールでは、その参加者による評価とサマー・スクールの教育効果を明らかにするため、参加した高校生を対象にアンケートが実施された。アンケートの実施時点はサマー・スクール講座の開催初日、3日間のサマー・スクール講座の最終日、さらにレポート提出時の3時点である。これらを以下、事前アンケート、中間アンケート、事後アンケートと呼ぶことにする。

それぞれの時点で各アンケートがねらっているところは若干異なるが、どの時点においても実践されているサマー・スクールをどのように受けとめているかという問（評価）と、そうした名古屋大学教育学部での講座に参加することで将来の見通しがどのように変化し、本学部への理解やイメージがどのように変化するかという問（効果）が両方含まれている。今回のサマー・スクールは初めての試みでもあり、大学側では適切なプログラムを提供したつもりであっても、彼らが本当にどこまで興味・関心をもって参加できたか明らかにしておく必要がある。さらに、次回に向けてプログラムの改善に資するようなデータも得ておく必要がある。この場合、講義内容だけでなく、講座の指導者や仲間との関係も評価の対象になる。

一方、このサマー・スクールは高校生に本学部での学びのあり方を伝え、彼らの進路決定がスムーズにいくこと、さらには、高校での学びと大学での学びを繋いでいく高大連携も目指されてい

* 大学院教育発達科学研究科

** 大学院教育発達科学研究科博士課程

る。そこでサマー・スクールが今後、高校での学習や進路決定にどのように影響するのか、また、高校生の目に本学部がどのように映り、サマー・スクールの講座を通していかに変化していくのかを見ることで効果を確かめることも目指される。

各時点でのアンケートの目的をやや詳細に記述すれば以下ようになる。事前アンケートではまずサマー・スクールに参加した動機および、サマー・スクールへの期待を明らかにすることが第一の目的である。第二は参加者が大学入学の目的をどのように考えているか、また、学部選択に当たって何を重視するかを見ようとするもので、大学の入学意図や意思決定について明らかにすることが目指されている。そして第三は参加者の目に映った本学部のイメージを知ろうとするもので、これはサマー・スクール講座をとおして学部で学ぶ内容の一部が示され、スタッフも関わることから、本学部のイメージの形成変容に焦点をあてたものである。サマー・スクールの一つの効果の指標ともなる。従ってこの部分の質問は3時点で繰り返して実行されることになる。

中間アンケートは3日間のサマー・スクールに対する参加者の評価を見ようとするのが第一の目的として構成される。意欲的に参加したか否かの自己評価に始まり、それが何故なのかの理由、さらに後輩に勧めたいか否か等の選択式の質問、そして参加者の気持ちをより深く理解するために自由記述式の質問も加えている。自由記述の内容は、学んだ内容の認識、今後進路を考える上での有効性、講座についての感想や疑問点、取りあげてほしいテーマ、レポート作成にあたっての疑問や心配等である。この自由記述の部分はサマー・スクールについての評価だけでなく効果もみることになる。

事後アンケートは実際のサマー・スクール参加後のレポート作成までを含めたサマー・スクール全体の評価を問うている。選択式の間は中間アンケートの内容と近似しているが自由記述式の内容は内容的に若干異なっており、サマー・スクールの体験が今後の高校での学習にどのように関連すると思うかという効果に関する問が新しく加えられている。

このようなアンケートを通してサマー・スクールを今後どのように発展させていけばよいのかや高大連携の一つの方法としてどの程度有効であるかが明確化するはずである。

方 法

- 1 調査対象者 平成14年度本学部主催のサマー・スクールに参加した高校2年生44名。
- 2 調査方法 質問紙法
- 3 調査時期 事前アンケートはサマー・スクール開催初日オリエンテーションのすぐ後に全体で実施された。中間アンケートは3日間のサマー・スクールの最終日に各グループごとに実施された。事後アンケートは最終レポート提出時に同封して、返送された。事前・中間とも44名全員の回答を得たが、事後アンケート提出者は37名であった。
- 4 調査内容
 - (1) 事前アンケート 申し込み動機、サマー・スクールへの期待（自由記述）、大学へ行く目的、大学の学部を選ぶ際に重視することがら、名古屋大学教育学部のイメージ、名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ、意見・感想欄
 - (2) 中間アンケート 参加意欲とその理由、参加満足度とその理由、日程に関する評価、名古屋大

学教育学部のイメージ、名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ、サマー・スクールを後輩に勧める程度、進路に役立ったかどうかについての自由記述、意見・感想欄

- (3) 事後アンケート レポートへの取り組み意欲とその理由、参加満足度とその理由、学習に役立つ程度についての自由記述、名古屋大学教育学部のイメージ、名古屋大学教育学部で学ぶことのイメージ、サマー・スクールを後輩に勧める程度、進路に役立ったかどうかについての自由記述、意見・感想欄

結果

今回のサマー・スクールでは、参加者に対し、計3回のアンケート調査が行われた。はじめに、初日に行った事前アンケートの結果、次に、前半が終了した3日目に行った中間アンケートの結果、そして、サマー・スクール終了後に行った事後アンケートの結果についてまとめ、最後に全体を通しての結果を報告する。

1. 事前アンケートの結果

サマー・スクール初日の参加者の内訳を表1に示す。

参加者は、男子13名、女子31名であった。コース別に見ると、コース1は11名、コース2は12名、コース3は11名、コース4は10名であった。

次に、このサマー・スクールに申し込んだ理由をたずねている。結果を図1-1に示す。

男子では、「学校の先生に勧められたから（4名）」という理由が最も多く、ついで「進学先としてこの学部を考えているから（3名）」、「友人に誘われたから（2名）」、「その他（2名）」となっている。一方、女子では「内容に興味を持ったから（23名）」が群を抜いて多く、ついで「進学先としてこの学部を考えているから（4名）」、「友人に誘われたから（2名）」となっている。その

表1 男女別、コース別に見た参加者の内訳

	コース1	コース2	コース3	コース4	計
男子	6	6	0	1	13(29.5)
女子	5	6	11	9	31(70.5)
計	11	12	11	10	44(100.0)

()は%

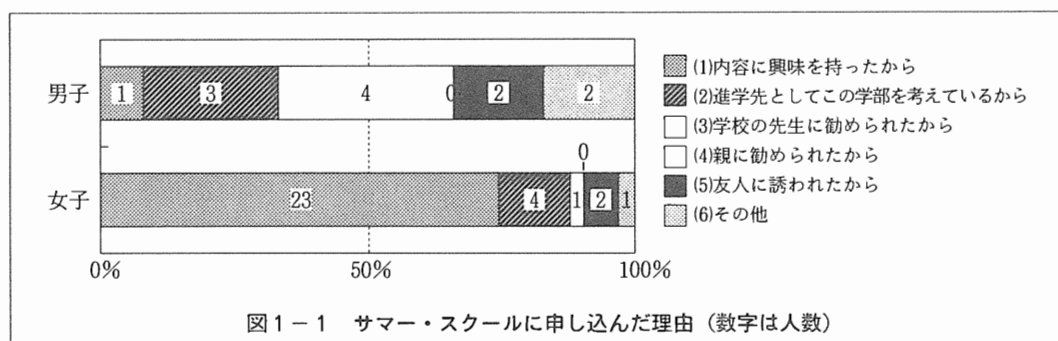


図1-1 サマー・スクールに申し込んだ理由 (数字は人数)

他の回答は「追試でオープンキャンパスに行けなかったから（男子）」「進路を考える上で（男子）」「大学には行ってみたかったし、新しく知った学部も体験したかったからです。特に心理学は何をしたらいいのか興味を持ったので（女子）」という内容であった。

次に、このサマー・スクールにどんなことを期待しているかを自由記述によりたずねた。最も多かった回答は、「大学での授業がどんなものなのか知りたい」「大学の雰囲気をつかみたい」といった大学に関する知識を増やしたいというもので、11名であった。さらに「教育学部では、どのようなことを学べるのかということを経験できると聞いたのでとても楽しみです」「この学部で実際にやっていることを知りたい」など、教育学部ではどのようなことを学べるのかについて知りたいとしている者が4名であった。

並んで多かったのは、「大学で心理学について学びたいと考えています。でも今は心理学について何も知らないので、心理学についての知識を増やしたいです」「外国の学校・教育のしくみについて興味があるので、多くの知識を身につけて今後に役立てたいです」「心理学について少しでも学べるといいなあと考えています」のような、現在の興味をより深めたり広げたりしたいとしている者が、11名であった。

次いで多かったのは、「私はまだ具体的な進路を決めていないので、先生がおっしゃられたように『自分探し』をぜひともしたいと思います」「自分の考えている進路に少し迷いがあるので、少しでも参考になればいいと思います」「自分にとって、自分の新たな可能性を自分で見つける場になること」という、進路や将来について考えるきっかけであるとしている者が8名であった。

他には、「将来、先生になりたいので、仕事の内容や仕組みを学びたい」「他校生と知り合える」などがあがっていた。

次に、大学に行く目的を3つ以内でたずねた。結果を男子は図1-2に、女子は図1-3に示す。

男子では、「興味のあることを学ぶため（7名）」「人間関係を広げるため（7名）」がもっとも多く、ついで、「幅広い知識を身につけるため（6名）」が多かった。女子では「興味のあることを学ぶため（28名）」がもっとも多く、つづいて「幅広い知識を身につけるため（16名）」、「人間関係を広げるため（14名）」となっている。

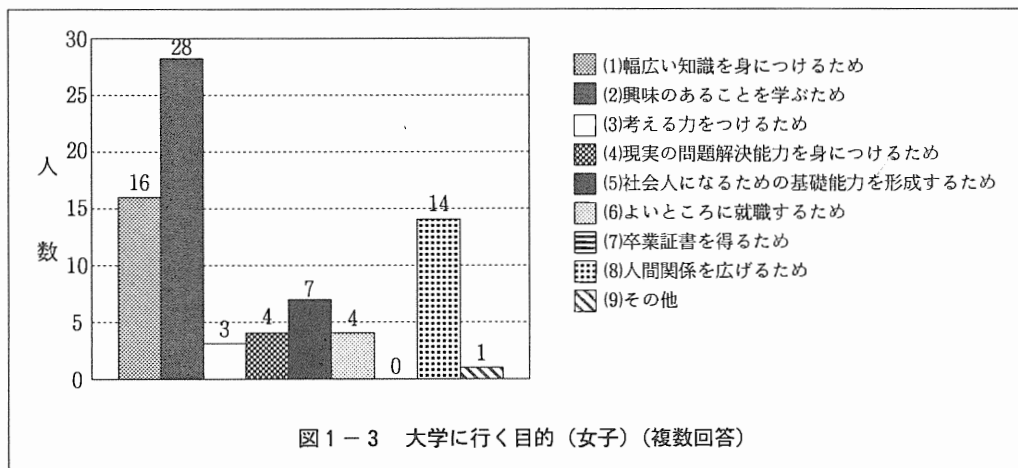
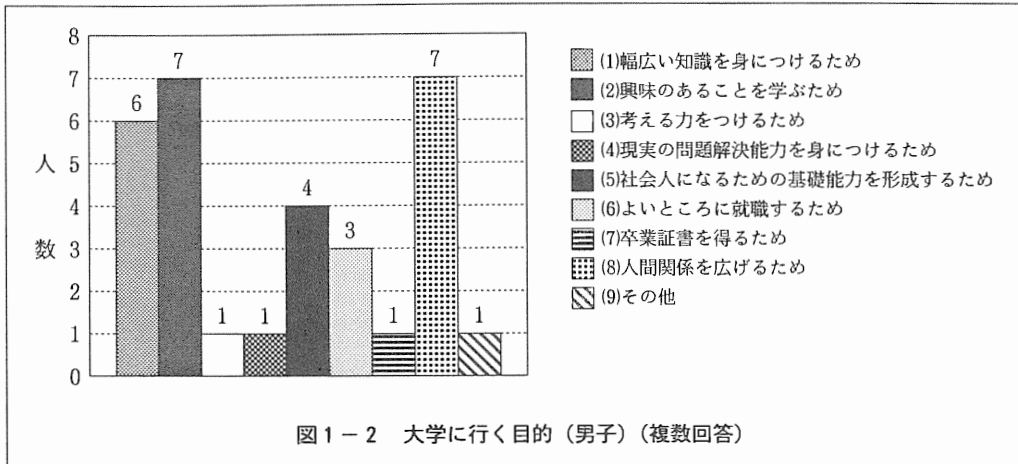
次に、大学の学部を選ぶ際に重視することをいくつか挙げ、それらをどの程度重視するかをたずねている。結果を男女別に図1-4、図1-5に示す。

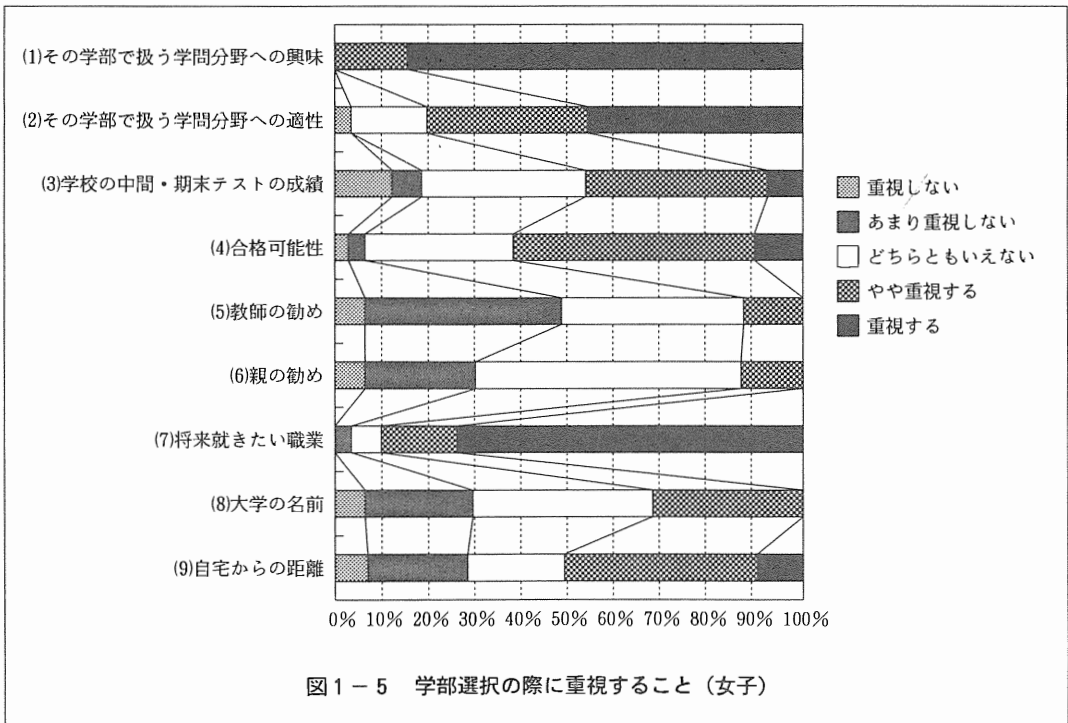
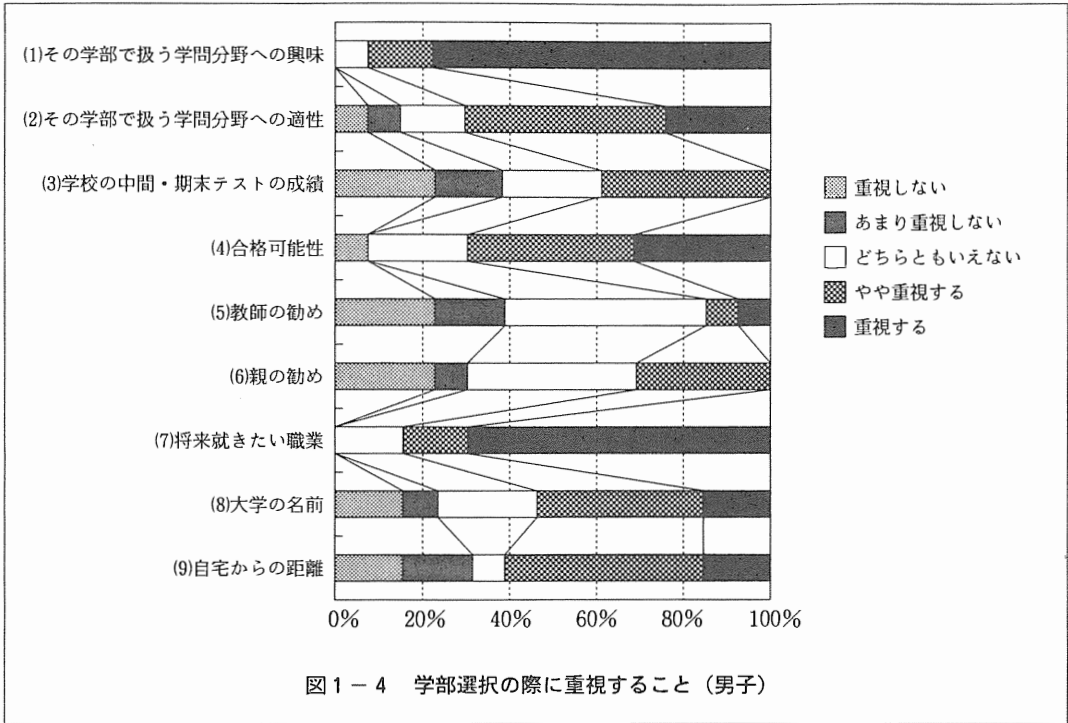
男女とも重視する程度が高いのは、「その学部で扱う学問分野への興味」、「将来就きたい職業」、「その学部で扱う学問分野への適性」である。男子では「合格可能性」も重視している。逆に重視していないものをみていくと、「教師の薦め」を重視していないことがみてとれる。

この他に重視することを自由記述形式でたずねたところ、「将来につながる事。夢」「臨床心理学をしっかりと学べる所へ行きたい」「その学部で学ぶことによって資格がとれるかという点も少々気になる」「ふんいきがよいかんじだといい」「キャンパスの雰囲気」「大学の施設（設備？）とか、交通の便」などがあげられた。

次に、名古屋大学の教育学部のイメージをたずねている。この結果については3回の調査のまとめで述べる。

次に、教育学部はどんなことを学ぶところだと思うかについて、自由に記述するよう求めた。この結果についても、3回の調査のまとめで述べる。





2. 中間アンケートの結果

サマー・スクールの前半が終了した3日目に行ったアンケートの結果をまとめた。

まず、この3日間の日程で学んだことを自由記述形式でたずねている。コース別に回答を概観する。

コース1では、「今まで知らなかったインドネシアやカンボジアの歴史と、その国の今の教育制度についてなどを学んだ」ことや、そこから考えたことを記述した、非常に具体的な回答が多かった。

コース2では、「授業というものをとりあげて、授業をする側と受ける側の両方をよく知ることができた」「授業者の仕事、役割についていろいろ考えて意見を交わして、実際自分たちで先生として授業を体験するなどいろいろな経験ができた」というように普段とは逆の立場を経験したことを記述したものが多かった。

コース3では、「いろいろな視点からモノを見て、それについて考えること」「いつもは当たり前すぎてよく考えていないことも改めて考えさせられました」など、普段とは異なった視点で物事をみていくことを学んだとするものが多かった。

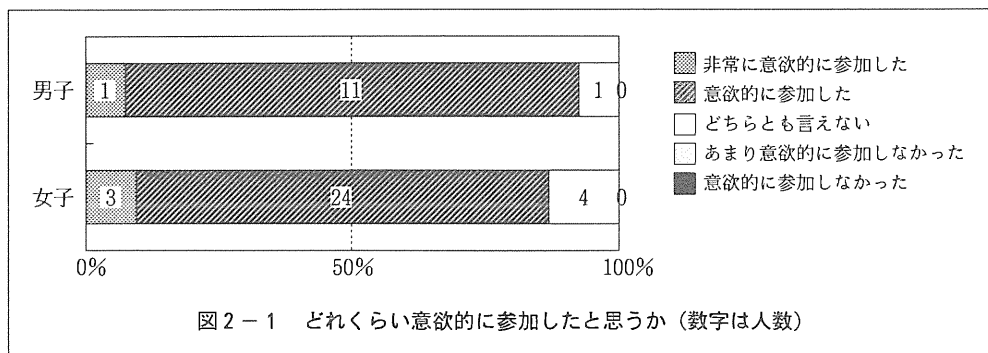
コース4では、「人間の行動について、その行動をしてしまう、隠された原因のようなもの」のように人間の行動の原因に関するものが多かった。

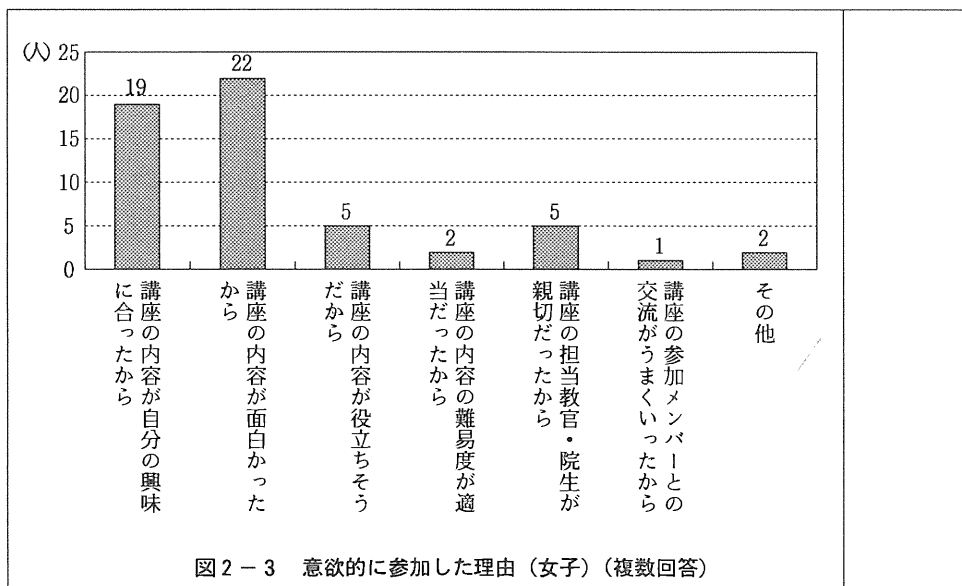
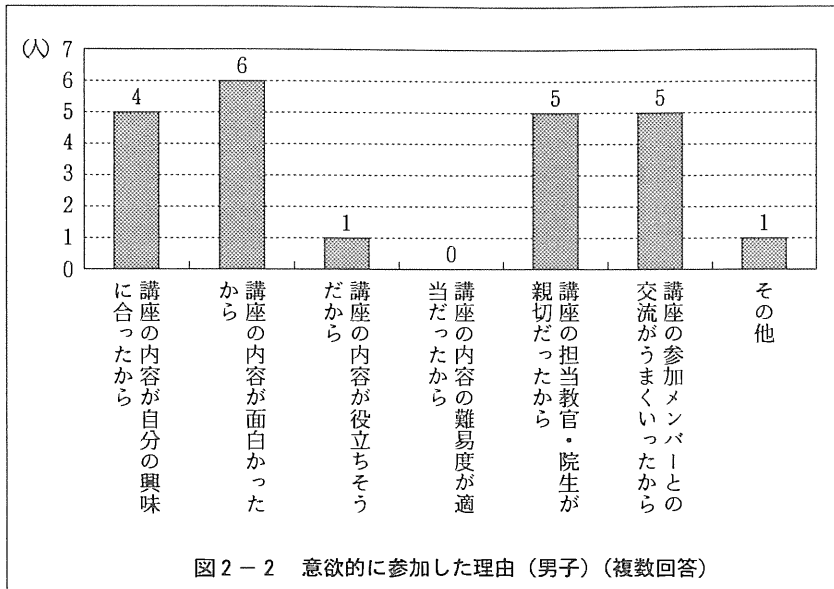
次に、このサマー・スクールにどれくらい意欲的に参加したかをたずねた。結果を図2-1に示す。

男女ともおおむね意欲的に参加したと感じている。

つづいて、意欲的に参加した理由としてどのようなことが考えられるか2つ以内で回答を求めた。男女とも上の設問で「意欲的に参加しなかった」「あまり意欲的に参加しなかった」と回答した者はいなかったため、これらはすべて意欲的に参加した理由と考え、結果を男女別に、それぞれ図2-2、図2-3に示した。

男女とも、上の設問で男子では「講座の内容が面白かったから」「講座の担当教官・院生が親切だったから」「講座の参加メンバーとの交流がうまくいったから」などが多くあげられた。女子では「講座の内容が面白かったから」「講座の内容が自分の興味に合ったから」が多かった。その内容としては、ひとは「非常に意欲的に参加した」と回答した者で「あまり名古屋の方に行くことがなかったので、バスや電車などを使った登校も楽しくて新鮮だった(男子)」と回答してお





り、残り 2 人はいずれも「どちらとも言えない」と回答した者で「積極的に意見を出せなかったし、人前でうまく話すことができなかった (女子)」「なんだか自分の興味にあまり合わないからと、ずるずる受けていた気がする (女子)」と回答していた。

次に、このサマー・スクールに参加してよかったかをたずねた。結果を図 2 - 4 に示す。

男女ともおおむね参加してよかったと回答している。特に女子については、「非常に良かった」「よかった」をあわせると 30 人になり、96.8% の者がよかったと感じているということになる。つづいて参加してよかった (よくなかった) 理由をたずねた。男女とも、参加して良かったかどうか

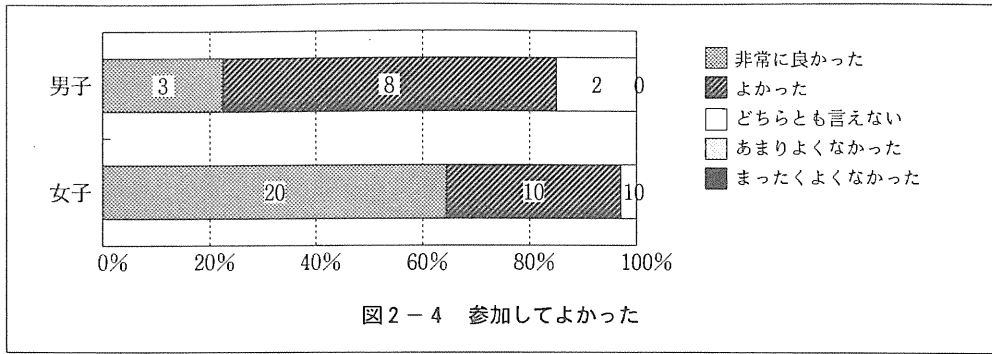


図2-4 参加してよかった

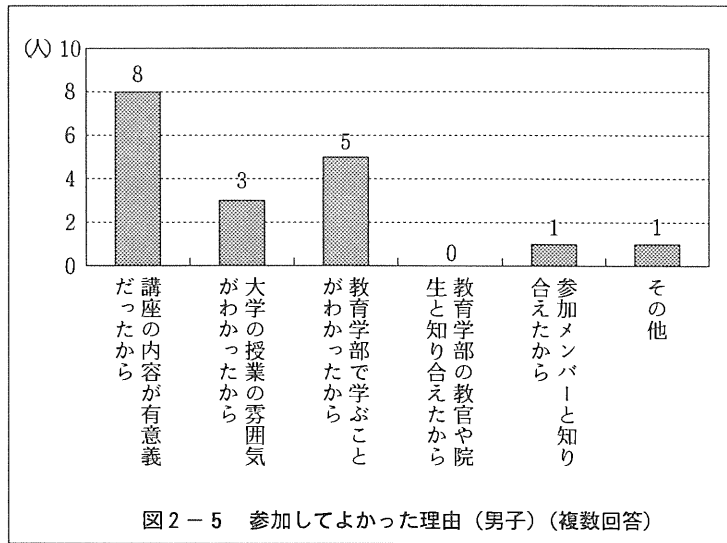


図2-5 参加してよかった理由 (男子) (複数回答)

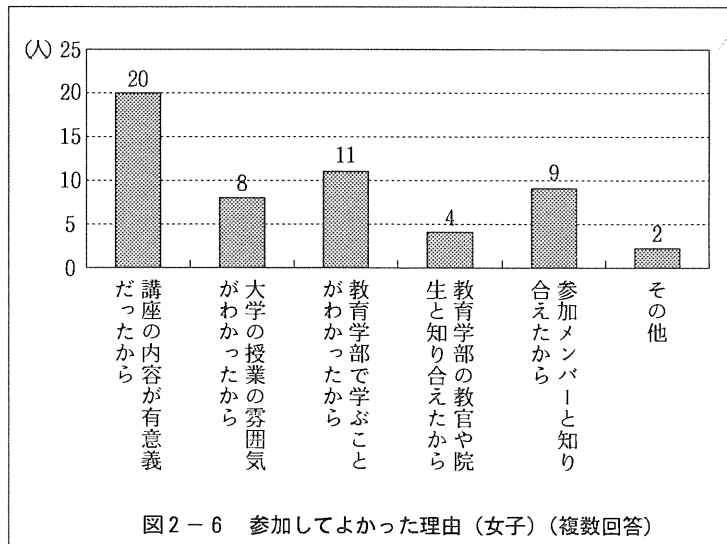


図2-6 参加してよかった理由 (女子) (複数回答)

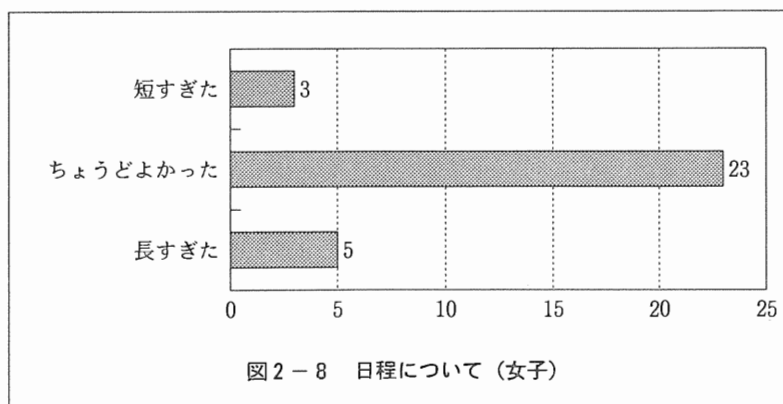
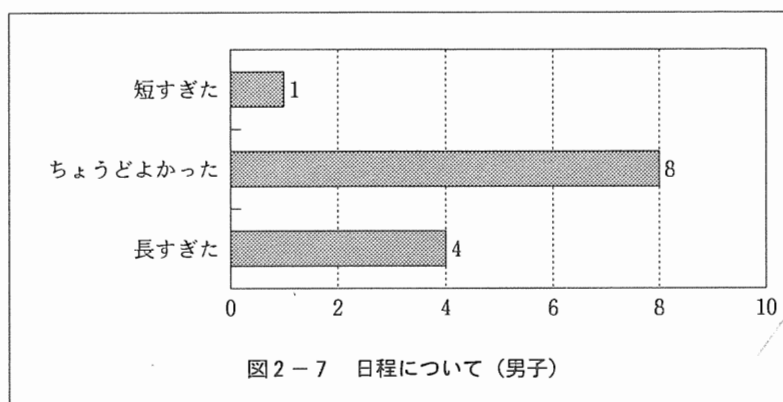
をたずねる設問で「よくなかった」「あまりよくなかった」と回答した者はいなかったため、これらはすべて参加してよかった理由であると考え、結果を、男子は図2-5、女子は図2-6に示す。

男女とも、「講座の内容が有意義だったから」が最も多く、ついで「教育学部で学ぶことがわかったから」「大学の授業の雰囲気がわかったから」となっている。女子では「参加メンバーと知り合えたから」という理由も多くあがっている。

次に、講座の日程についてどのように感じられたかを「長過ぎた」「ちょうどよかった」「短すぎた」のいずれかで回答を求めた。結果を、男子は図2-7に、女子は図2-8に示す。

サマー・スクールの日程については、男女とも多くが「ちょうどよかった」と感じている。「短すぎた」というものは、具体的に適当だと思う日数をたずねたところ、「4日ぐらい」という者が2名、「5日ぐらい」という者が2名であった。「長すぎた」と回答した者は、「2日ぐらい」が6名、「1日ぐらい」が2名、「1～2日」とした者が1名であった。

次に、事前アンケートと同様、名古屋大学の教育学部のイメージと、教育学部はどんなことを学ぶところだと思うかについてたずねているが、これらについては3回の調査のまとめにおいて述べる。



次に、このサマー・スクールを後輩に勧めたいと思うかどうかをたずねた。結果を図2-9に示す。

女子は「ぜひ勧める」「勧める」を合わせて83.9%の者が勧めたいと考えているのに対し、男子は勧めたいと考えている者が半数に満たなかった。

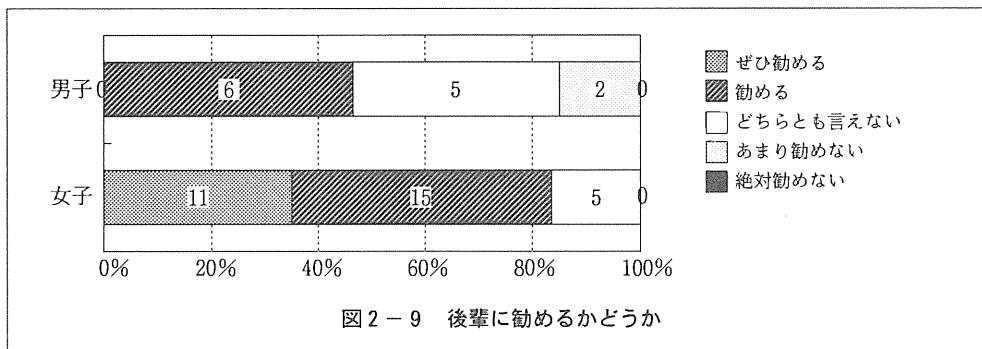
次に、このサマー・スクールが進路を考える上で役に立ったかどうか、さらにどのように役に立ったか、あるいは役に立たなかったのかについて自由記述による回答を求めた。

44名全員からの回答が得られた。そのうち「将来教育学部にはいかないのであまり役に立たなかった」「外国についてや教育学を学ぶつもりはないから特に役に立たなかった」とした2名以外の42名が、おおむね「役に立った」という内容の回答になっていた。

最も多かったのが「外国の教育制度についてすごく興味をもつようになった」「発展途上国のために何かためになることをするのもやりがいがあるかなと思いました」「もっといろいろな事を知りたいと思うようになった。大学で心理学の勉強がしたい」など、これから学びたいと思う分野に関する回答と、大学の授業の雰囲気や教育学部で学べることがわかったという回答で、それぞれ10名が回答していた。次いで、「日本以外に目を向けたことによって自分の視野が広がった」「人に何かを教えるという立場に立ったとき、どのようなことに気をつければ良いかが、今までとは違った視点からわかった」など、自身の考え方に関する回答が多く、6名であった。「自分の進路を考える上でこのような道もあることがわかって選択の幅が広がった」というように進路選択の幅や進路を考えたとときの視点に関するものが3名であった。

ついで、この講座についての感想や疑問、提案などを記述するよう求めた。多くの者が、参加して楽しかったという内容の回答をしていた。希望としては、「模擬授業の準備時間と授業時間をもっと少し多くってほしかった」「もっと体験のようなものをしてみたかった」というものが多かった。

最後に、レポート作成にあたって疑問に思うことや心配なことがあれば挙げるよう求めたところ、14名がレポート作成に関する不安を挙げていた。具体的には「文章を書くのが苦手だからうまく書けるかどうか」「ちゃんとまとめられるか心配」などであった。



3. 事後アンケートの結果

サマー・スクール終了後に回収された事後アンケートの結果を以下にまとめる。

まず、サマー・スクールの最後に課されたレポート作成について、レポート作成活動にどれくらい意欲的に取り組んだかをたずねた。結果を図3-1に示す。

意欲的に取り組んだと思う者は男女とも半数に満たない。また、男子では意欲的に取り組まなかったと振り返る者が約20%である。

つづいて、レポート作成に意欲的に取り組んだ、あるいは取り組まなかった理由を2つ以内で回答するよう求めた。上の問いで「あまり意欲的に取り組まなかった」「意欲的に取り組まなかった」と回答した者を除き、レポートに意欲的に取り組んだ理由についての結果を、男子は図3-2に、女子は図3-3に示す。

また、「あまり意欲的に取り組まなかった」「意欲的に取り組まなかった」とした者の回答は、「面倒だったから（3名）」「レポート作成の仕方がわからなかったから（2名）」「レポートのテーマが自分の興味に合わなかったから（1名）」であった。

次に、中間アンケートと同様、このサマー・スクールに参加してよかったかどうかをたずねている。結果を図3-4に示す。

男女ともサマー・スクール終了後の時点で、ほとんどの者が参加してよかったと回答している。

つづいて総合的に見て参加してよかった（よくなかった）理由として2つ以内で回答を求めた。上で「あまりよくなかった」「まったくよくなかった」と回答した者がいなかったため、これらはすべて参加してよかった理由として、結果を男子は図3-5に、女子は図3-6に示す。男女とも「講座の内容が有意義だったから」が最も多かったが、「教育学部で学ぶことがわかったから」「大学の授業の雰囲気がわかったから」という回答も得られた。

次に、サマー・スクールで体験したことが、今後の高校での学習とどのように関連すると思われるかについて、自由記述で回答を求めたところ33名の者が回答した。「あまり関連しないと思う」という者は1名であった。より心理学の勉強をしたいと思えるようになったことや、これまで以上に教師という職業に就きたいと考えるようになったことを理由として、意欲的に高校での学習に取り組めるようになったという意欲に関する回答をした者が16名であった。ついで「別の視点で物を見ることを考えるようになりました。これは高校生活でも活かせると思います」「物事を奥深く追求できるようになったと思う」のように考え方に関する回答をした者が9名であった。他には、サマー・スクールで学んだ内容から、世界史や英語など具体的な教科に関して興味を持って取り組むことをあげた者や、授業を受けるときに逆の立場を考えながら受けるという者もいた。

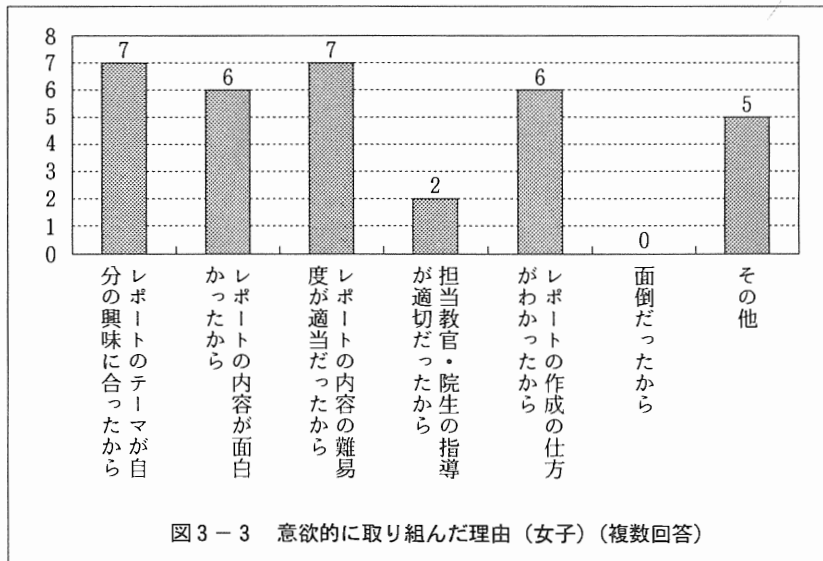
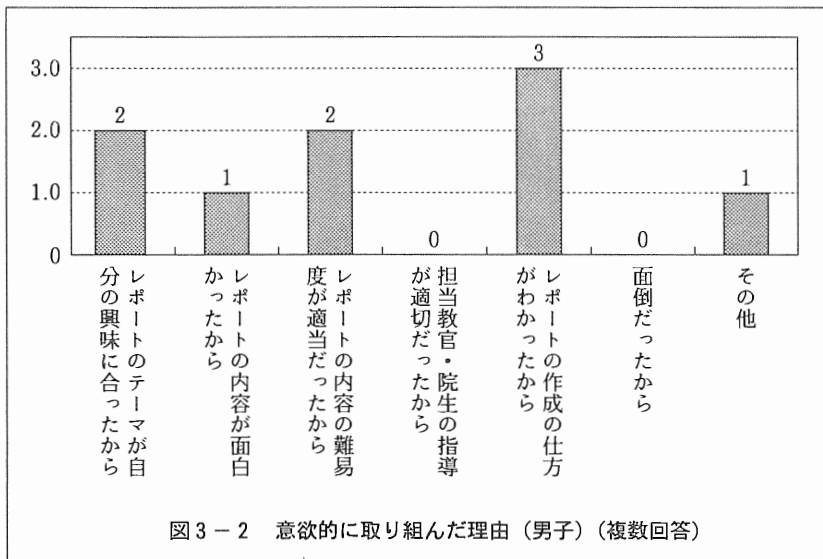
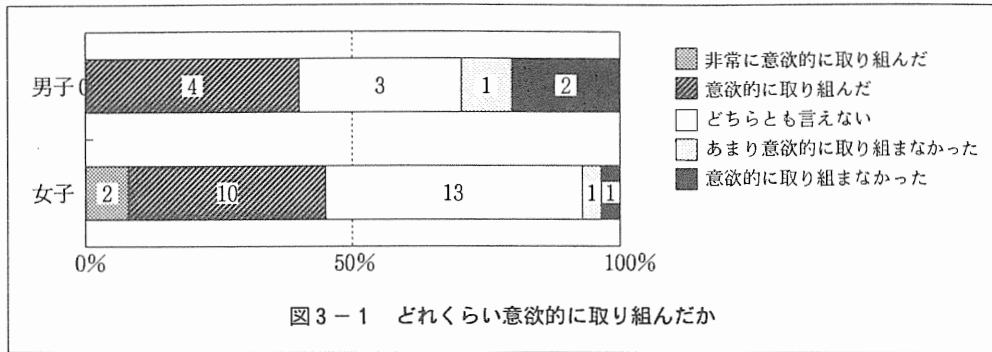
さらに、サマー・スクール終了後の時点においても、名古屋大学のイメージと、教育学部がどんなことをするところだと思いかについてたずねている。これらについては3回の調査のまとめで述べる。

次に、後輩に勧めたいかどうかをたずねた。結果を図3-7に示す。

女子では「ぜひ勧める」と「勧める」の者を合わせると8割の者が勧めたいと考えているといえる。男子は「ぜひ勧める」という者は少ないが、約7割が勧めたいと考えている。

次に、このサマー・スクールが今後の進路を考える上で役に立ったかどうかと、どのように役に立ったか、あるいは役に立たなかったかについてたずねた。

全部で36名の回答が得られた。そのうち「サマー・スクールは楽しかったし、面白かったけれど、



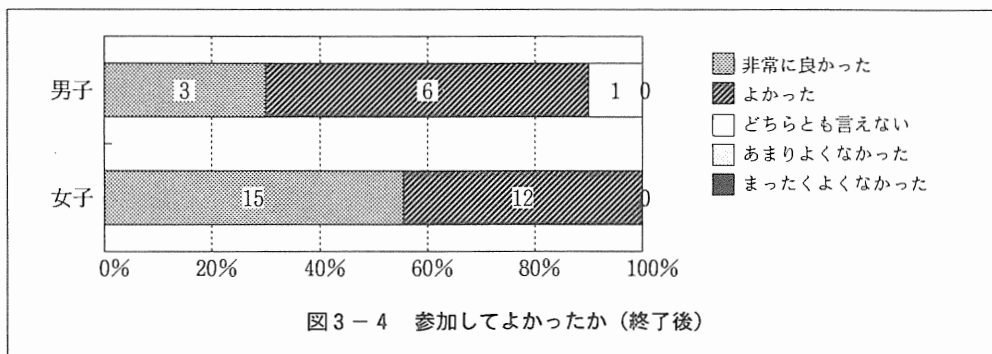


図3-4 参加してよかったか (終了後)

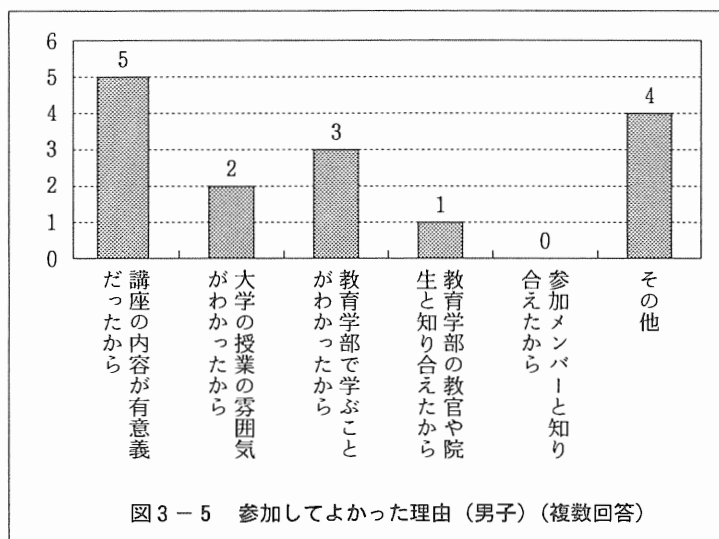


図3-5 参加してよかった理由 (男子) (複数回答)

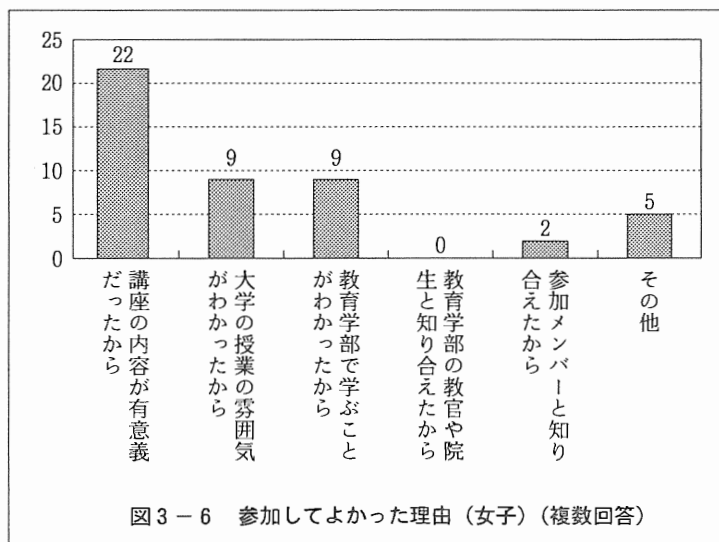
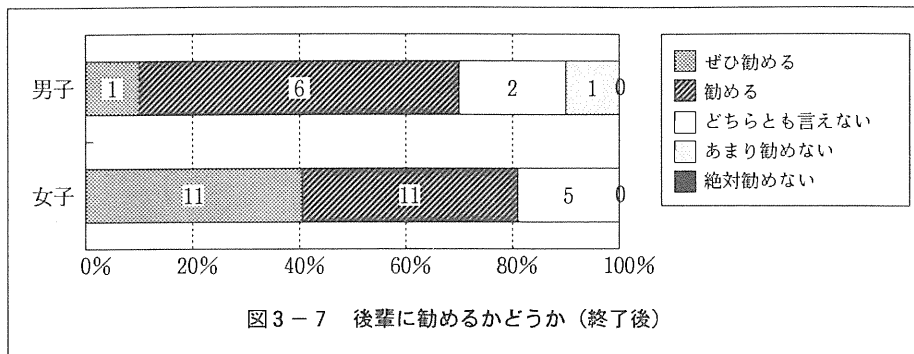


図3-6 参加してよかった理由 (女子) (複数回答)



進路を考える上で役に立つのか立たないのかはよくわからない」「他にやりたいことが見つかったのであまり役に立たなかった」とした者以外の34名が、「役に立った」という内容の回答になっていた。

最も多かったのが「どのような学問なのか、というのが明確にわかり、今まであいまいだった進路に目標がもてるようになりました」「今までただ漠然としていた『学びたいこと』が少し具体的になった気がします」という、明確な目標が持てるようになったという回答と、「教師の仕事をし体験できたので、とても役に立ったと思う。教師目指して頑張れそうな気がする」「教育が好きだとわかった。自分の進みたい道を決めることができたのでとてもよかった」「心理学がとてもおもしろいということが分かって、心理学にますます入りたくなった」などのように、より具体的な目標を記述した回答で、いずれも7名であった。

他には、将来のことを考えるきっかけとなったとする者、教育学部や大学でどんなことを学ぶのが明確になったとする者、進路を決める幅が少し広がったという者、講義を受けて視野が広がったという者があった。

最後に感想や疑問点、提案などがあれば、記述するよう求めた。レポート課題も含め、有意義であった、よい経験ができた、と振り返る者が多かった。また、この事後アンケートでは、希望として、サークル活動を見てみたかった、学食を利用してみたかった、教育学部の授業風景を見たかったというような、学生生活をより身近に体験したかったことが多くあげられていた。

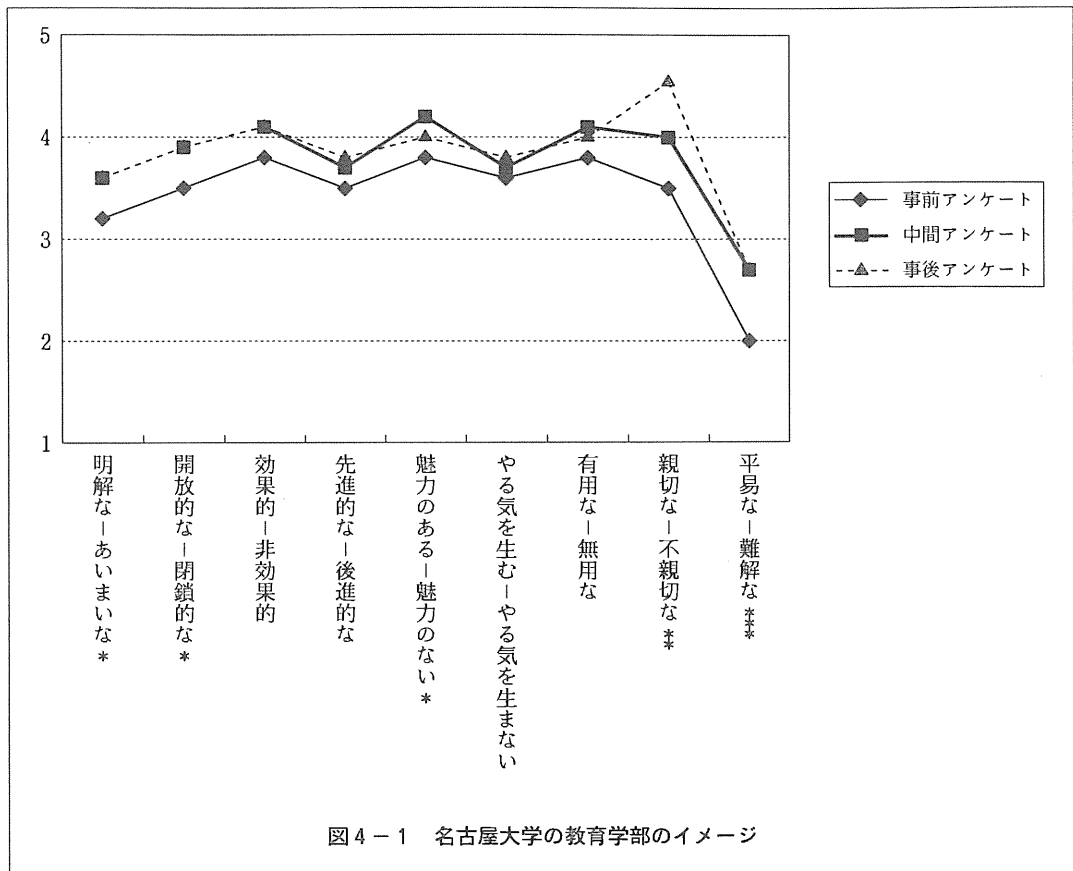
4. 3回のアンケートのまとめ

3回のアンケートにおいて、名古屋大学の教育学部のイメージと教育学部はどんなことを学ぶところだと思うかについて、繰り返したずねられたが、それらの設問に関する結果を記述する。

(1) 名古屋大学の教育学部のイメージ

事前アンケート、3日目終了後の中間アンケート、サマー・スクール終了後のレポート作成後に送付された事後アンケート、のそれぞれにおいて、名古屋大学の教育学部のイメージをSD法にてたずねた。結果をグラフにして図4-1に示す。

なお、グラフは上方向が、「明解な」「開放的な」という方向に、下方向が「あいまいな」「閉鎖的な」という方向になっている。



図中の*については、有意水準を示し、* $<.05$ 、** $<.01$ 、*** $<.001$ である。

事前アンケート時における参加者の本学部へのイメージは、どちらかといえば明解で開放的、効果的であり、先進的、魅力もありやる気を生み有用で親切な、しかし難解なイメージであったことがわかる。

その後のアンケートで変化に統計的な有意差がみられた項目（図中*で示す。）は、あいまいか明解かといった観点では、中間的であったイメージがより明解に変わっている。また開放的か閉鎖的かという軸では、より開放的になっている。魅力的かどうかについては、より魅力的になっている。親切か不親切かについては、事前アンケートの時よりも大きく親切なイメージになっている。平易か難解かについては、はじめは難解であったイメージが難解でない方向に変化している。

一方、変化に有意差がないものは、効果的か非効果的か、先進的か後進的か、やる気を生むかやる気を生まないか、有用か無用か、といったイメージであった。しかし、これらについても有意差はないものの、よりイメージが明確になる方向へ変化する傾向がみられた。

(2) 教育学部はどんなことを学ぶところか

教育学部はどんなことを学ぶところだと思うか、思いつくだけ書くよう求めた。あげられた個数

としては、事前アンケートでは平均2.48個、中間アンケートでは平均2.98個、最終アンケートでは平均3.27個であった。あげられた個数が増加していることからイメージがより展開していることが予想される。

書かれた内容についてみていくと、事前アンケートの時点では「教育」「心理学」「教員になるための知識」といったものが多く、中間アンケートでは、「人間」「人の行動」「教育の仕方」「教える立場」などのように回答に具体性が加わった。さらに事後アンケートでは、「教育」「心理学」「外国の教育状況」といった回答に加えて、「教育のあり方」「心理学的に物事を考えること」「自分の言いたいことをどうやって伝えるか」のようにより概念的な回答がみられた。

考 察

1. 参加者からのサマー・スクールに対する評価について

参加者からのサマー・スクールに対する評価については、中間アンケートおよび事後アンケートにおいて、参加者の参加意欲、満足度および後輩に勧めるかについて尋ねた。参加意欲は、中間アンケート、事後アンケートいずれも高かった。その理由として、「講座（レポート）の内容が面白かったから」「講座（レポート）の内容が自分の興味にあったから」があげられた。事後アンケートでは、「レポートの作成の仕方がわかったから」という理由も多かった。

また、満足度は、中間アンケートでは男子の85%、女子の97%が参加して非常によかった、あるいはよかったと回答しており、おおむね高い評価を得られたと考えられる。同様に、事後アンケートは84%の回収率にとどまったものの、男子では90%、女子では全員が参加して非常によかった、あるいはよかったと回答した。これらの結果から、84%の回収率を考慮に入れたとしても、高い満足度を得られたと考えられよう。参加してよかった理由としては、「講座の内容が有意義だったから」がもっとも高かった。これは、もともとの参加動機である「内容に興味を持ったから」（事前アンケート結果）と符合したことが高い満足度を引き出したと考えられる。

また、後輩に勧めるかどうかについては、中間アンケート時点では男子46%、女子84%が後輩にぜひ勧める、あるいは勧めると回答したが、事後アンケートでは、男子70%、女子82%となった。これも回収率を考慮する必要があるが、おおむね後輩にも勧めたいサマー・スクールという回答が得られたことになる。

2. サマー・スクールの実施効果について

サマー・スクールの実施効果については、いくつかの視点から検討することができる。まず、本学部のイメージの変化に注目すると、事前アンケートでは、明解、開放的、効果的、先進的な、魅力のある、やる気を生む、有用な、親切的な、難解なという、最後の難解なをのぞいては、比較的好意的なイメージを持っていることが分かる。しかし、得点的には「3」の「どちらとも言えない」に中心化しており、そのイメージが曖昧であることが分かる。しかし、これらのイメージは中間アンケート、事後アンケートと経過するに従い、より、好意的な方向へ得点に変化した。すなわち、より明解で、開放的、効果的、先進的な、魅力のある、やる気を生む、有用な、親切的な方向へ得点に変化した。また、最後の難解なについては、平易にはならなかったが、難解の程度が減少した。

これらの変化はサマー・スクールに参加した効果と考えることができる。

さらに興味深いのは、「名古屋大学の教育学部はどんなことを学ぶところだと思いますか」と20答法の形式で、10個の解答欄を提示した問いへの回答である。事前アンケートでは、教育学、心理学、教員になるための知識など、抽象的な回答が多かったが、講座を終えたばかりの中間アンケートでは、「人間」「人の行動」「教育の仕方」「教える立場」など、講座内容にそった回答が多く見られた。さらに、レポート提出後の事後アンケートでは、「教育のあり方」「心理学的に物事を考えること」「自分のいいたいことをどうやって伝えるのか」といったようにより概念化された回答がみられた。回答する個数にも変化が見られ、アンケートを重ねるにつれ、回答数が増えたことも興味深い。

これらの結果は、サマー・スクール参加によって参加者が本学部へのイメージを、単に教育学、心理学といった看板ではなく、学ぶことのより概念的な意味を理解するに至ったことを示していると考えられる。こういった理解は学部に入學してからの幻滅感や期待外れといったことを防ぐ効果があると考えられる。今回のサマー・スクールの試みは、高大連携の方法を模索する目的をその目的のひとつとして持つが、以上の結果は大学への入学前にこのような講座を体験する意味があることを示す結果と考えられた。